

詩人と医者と「慰者」：キーツと〈癒し〉の詩学

山内, 正一

九州大学比較社会文化研究院国際社会文化専攻・国際言語文化講座

<https://doi.org/10.15017/8641>

出版情報：比較社会文化. 7, pp.127-137, 2001-03-01. 九州大学大学院比較社会文化学府
バージョン：
権利関係：

詩人と医者と「慰者」

— キーツと〈癒し〉の詩学¹⁾ —

The Poet, the Physician, and the 'Healer'

— Keats and the Poetics of 'Healing' —

山内正一*

Shoichi YAMAUCHI

キーワード：アポロ、癒し、メランコリー、神秘主義、人道主義

キーツは、薬剤医師の免状を取得しながら医業を捨て、いわばメスを紙筆に持ち替えた男である。この経歴が詩人を生涯にわたって苦しめたように、筆者には思われる。「詩人は賢者、人道主義者、そして万人の医師」(*The Fall of Hyperion*, I, 189-90: "...sure a poet is a sage; / A humanist, physician to all men.")²⁾ という幾分オプセシブな詩句の存在がその証となろう。両親を亡くした4人兄妹の長男として一日も早く医師として身を立てねばならなかったキーツではあるが、身内に燃える詩心抑え難く、彼は周囲(特にキーツ兄妹の後見人)の期待を裏切ってしまう。かくしてキーツは、己の選択の正当性を周囲にも自分自身にも納得させるため、詩人の仕事が医者 of のそれに劣るものではないことを実証せざるを得なくなる。したがって、「詩人は万人の医師」という先の言葉にはキーツの自己弁護の側面が潜んでいる。キーツにとって、詩人は— 医者に劣らず— どうしても人生の痛苦の「慰者」でなければならなかったのだ。

キーツの詩の読者なら、彼の作品がいかにか〈病〉と〈癒し〉のイメージラリーに満ちているか承知のはずである。初期の作品から一例を挙げれば、「詩とは尽きせぬ光の雨。詩は至高の力。(中略)だが、ミュージカからたとえ生を受けても、力のみにては墮天使も同じ。その様な詩を喜ぶのは、根こそぎにされた木々、暗闇、ウジ虫、死衣、墓場のたぐいだ。なぜなら、力のみは、人生の労苦を喰らい育ち、詩の偉大な目的を忘却するからだ。その偉大な目的とは、人類の苦悩を和らげ、人類の思想を高める友となる

こと」(*Sleep and Poetry*, 235-47) という詩行がある。キーツが理想とする詩人は、この様に人類の「慰者」たることを宿命づけられた存在なのである。³⁾

Endymion を初めとする初期のキーツの詩に顕著に見られる特徴として、アポロと作者の同一化を指摘できる。この現象は、キーツが自己に課した〈詩人の使命〉という観点から見ると、きわめて象徴的な意味を持つ。周知の通り、アポロは太陽/光の神であり、詩歌/音楽の神であり、かつまた医術の神でもある。⁴⁾ アポロのこの三つの属性が、キーツにとっての詩/詩人のレーゾン・デートルを暗示している。考えてみれば、実生活の場において〈詩〉は、キーツの宿痾たる〈メランコリー〉の闇を払い、彼の心身の痛苦を癒してくれる原動力であった。その意味で、キーツにとって〈詩〉は、文字通り〈光〉であり〈医術〉でもあったのだ。とすれば、キーツは、間違いなく「己の脈搏の上で試して」のちに、⁵⁾ 自分の天職として詩人— 〈光〉、〈詩歌〉、〈医術〉の三幅対を体現した神アポロ— へのみちを選んだと言うことができよう。

本論においては、〈癒しとしての詩〉というキーツの詩の特徴に光を当てる。その際に、*Endymion* や *Hyperion* という大作に加えて、従来あまり注目されることのなかった詩人の初期作品をも十分に吟味の対象としたい。

(一)

Ian Jack はキーツの詩におけるアポロの存在の重要性を

指摘した先駆的批評家であるが、彼は次のような気になる発言を行なっている。

...none of the earlier references to Apollo in Keats makes him more than the God of the Sun and the God of Poetry....Nowhere (we notice) does Keats by this point in time [i. e., by the time of the composition of *Hyperion*] hint at Apollo's other role as the God of Healing (of which he must have been well aware).⁶⁾

果たしてそうであろうか。筆者には、作詩活動の当初からキーツの念頭には医者（‘healer’）としてのアポロが存在していたように思われるのであるが、以下しばらく、この点を検証することにした。

キーツの初期作品には興味深い事実が見られる。それは〈闇と光〉、〈都会と自然〉、〈病と癒し〉等に代表される二項対立の構図である。まず、闇と光の対比の例を挙げれば――

Whene'er I wander, at the fall of night,
Where woven boughs shut out the moon's bright ray,
Should sad Despondency my musings fright,
And frown, to drive fair Cheerfulness away,
Peep with the moon-beams through the leafy roof,
And keep that fiend Despondence far aloof.

Should Disappointment, parent of Despair,
Strive for her son to seize my careless heart;
When, like a cloud, he sits upon the air,
Preparing on his spell-bound prey to dart:
Chase him away, sweet Hope, with visage bright,
And fright him as the morning frightens night!

(*To Hope*, 7-18. 1815年2月作)

ここでは、「希望」がメランコリーの闇を駆逐する光のイメージで捉えられている。「あの落胆の悪鬼」(“that fiend Despondence”)とは――後に詳しく触れる通り――キーツの気質・体質上の宿病メランコリーを指す。メランコリーという病を癒す「光」の背後にアポロが存在するのは、言うまでもない。

次に、枚挙に暇がない都会と自然の対比のうちから一例を挙げる。

To one who has been long in city pent,
'Tis very sweet to look into the fair

And open face of heaven, — to breathe a prayer
Full in the smile of the blue firmament.
Who is more happy, when, with hearts content,
Fatigued he sinks into some pleasant lair
Of wavy grass, and reads a debonair
And gentle tale of love and languishment?
Returning home at evening, with an ear
Catching the notes of Philomel, — an eye
Watching the sailing cloudlet's bright career,
He mourns that day so soon has glided by:
E'en like the passage of an angel's tear
That falls through the clear ether silently.

(1816年6月作)

キーツがロンドンのガイ医学校での薬剤師修行の合間を縫って行なった、ロンドン郊外での散策の喜びを綴った無題のソネットである。瞬間に過ぎ去った戸外での一日の自然体験の喜びを歌うこの詩の背後には、暗くて辛い医学校／病院での生活の重圧が容易にみて取れる。ここで注目したいのは、キーツにおいては自然美体験と詩美体験(“reads a debonair / And gentle tale of love and languishment”)とが一体のものとして捉えられている点である。と言うことは、自然と詩歌が等しくキーツの都会／病院暮らしを慰めてくれたことを示唆している。詩歌の神アポロは戸外の自然／陽光の神でもあるのだ。

病と癒しの対比の例は、既に掲げた詩 *To Hope* に端的に表れている。そこでは「悪鬼落胆」(メランコリー)という病が「希望」の光によって駆逐され、詩人は憂鬱に閉ざされた「不吉な心」(“my boding spirit”)を癒されることになる。この詩の掉尾に置かれた詩人の祈りは、天球(星)に擬せられた「希望」の光が持つ治療能力(“celestial influence”)を強く示唆している。

So, when dark thoughts my boding spirit shroud,
Sweet Hope, celestial influence round me shed,
Waving thy silver pinions o'er my head.

(*To Hope*, 46-48)

この詩の制作時点でキーツが〈光〉の治療能力(‘healing power’)を強く意識していたことは、疑い得ない。作品 *To Hope* の場合には治癒をもたらす力の源(光源)は星であったが、同じことは月にも、そして太陽(アポロ)についても言えるはずである。そのことは、アポロの不在がキーツをいかなる心的状態に追い込んだかを見れば、ただちに明らかになる。

Too partial friend! fain would I follow thee
Past each horizon of fine poesy;
Fain would I echo back each pleasant note
As o'er Sicilian seas, clear anthems float
'Mong the light skimming gondolas far parted,
Just when the sun his farewell beam has darted:
But 'tis impossible; far different cares
Beckon me sternly from soft "Lydian airs,"
And hold my faculties so long in thrall,
That I am oft in doubt whether at all
I shall again see Phoebus in the morning:
Or flush'd Aurora in the roseate dawning!

(To George Felton Mathew, 11-22. 1815年11月作)

詩の愛好家 Mathew の友情を感謝する上の詩を書いた時、キーツはガイ医学校の病院の中を歩いていたという。⁷⁾ “far different cares / Beckon me sternly from soft “Lydian airs,” / And hold my faculties so long in thrall,”なる詩句の存在はそのことの反映である。大都会の病棟で苦悶する患者たちへの思いが胸中を過ぎるとき、キーツは「二度と再び夜明けのアポロの姿を見るのが無いのではないか」という不安に襲われる。この〈アポロ／ポイボス〉が太陽神のみならず、詩歌の神であり、詩人に癒し(‘healing’)をもたらす神でもあることは明白である。そのことは、詩友 Mathew との交わりがもたらす恵みをキーツが次のように列挙するところにも窺える。

The thought of this great partnership diffuses
Over the genius loving heart, a feeling
Of all that's high, and great, and good, and healing.

(To George Felton Mathew, 8-10)

したがって、キーツにとってアポロの消失は、彼の人生のすべての良きものの喪失を意味したのである。

光の神であり、詩歌の神であり、医術の神でもある慰者(‘healer’) アポロが癒す病とは、いかなる病であろうか。この病については、キーツ自身の証言が手掛かりになる。

...truth is I have a horrid Morbidity of Temperament
which has shown itself at intervals — it is I have no
doubt the greatest Enemy and stumbling block I have
to fear — I may even say that it is likely to be the
cause of my disappointment. How ever every ill has
its share of good — this very bane would at any time
enable me to look with an obstinate eye on the Devil
Himself —⁸⁾

キーツはここで持病の憂鬱症(メランコリー)に触れているのである。“disappointment”という共通の語の使用にも窺える通り、この病は先の *To Hope* に言及が見られる“that fiend Despondence”に他ならない。⁹⁾ 「悪魔」(“the greatest Enemy”) に準えられたこの病は、薬剤医師であるキーツをもってしても完治させることの困難な病である。しかし、キーツによれば、この病にもそれなりに有効な治療法があったように見受けられる。それは、心気を晴らす類の自然美／詩美体験(ある種神秘的なアポロ体験)である。

Full many a dreary hour have I past,
My brain bewilder'd, and my mind o'ercast
With heaviness; in seasons when I've thought
No spherey strains by me could e'er be caught
From the blue dome, though I to dimness gaze
On the far depth where sheeted lightning plays;
Or, on the wavy grass outstretch'd supinely,
Pry 'mong the stars, to strive to think divinely:
That I should never hear Apollo's song,
Though feathery clouds were floating all along
The purple west, and, two bright streaks between,
The golden lyre itself were dimly seen:
That the still murmur of the honey bee
Would never teach a rural song to me:
That the bright glance from beauty's eyelids slanting
Would never make a lay of mine enchanting,
Or warm my breast with ardour to unfold
Some tale of love and arms in time of old.

But there are times, when those that love the bay,
Fly from all sorrowing far, far away;
A sudden glow comes on them, nought they see
In water, earth, or air, but poesy.

It has been said, dear George, and true I hold it,
(For knightly Spenser to Libertas told it.)

That when a Poet is in such a trance,
In air he sees white coursers paw, and prance,
Bestriden of gay knights, in gay apparel,
Who at each other tilt in playful quarrel,
And what we, ignorantly, sheet-lightning call,
Is the swift opening of their wide portal,
When the bright warder blows his trumpet clear,
Whose tones reach nought on earth but Poet's ear.

(To My Brother George, 1-32. 1816年8月作)

しばし“Apollo's song”を聞く恍惚状態(“in such a trance”)

こそ、キーツが冀う脱メランコリー状態であった。この恍惚境は、自然美や詩美との合一がもたらす超現実的／超地上的なヴィジョン体験である。¹⁰⁾ このような神秘的恍惚状態において詩人は地上の痛苦を — 短時間ではあるが — 忘れることができるというのだ。

At times, 'tis true, I've felt relief from pain
When some bright thought has darted through my
brain:
Through all that day I've felt a greater pleasure
Than if I'd brought to light a hidden treasure.
(*To My Brother George*, 113-16)

ここにも光のイメージ (“some bright thought”) が付きまとっている。かように光と詩歌と医術の神アポロは、詩人に美体験をもたらす宿痼メランコリーを癒やしてくれる力の源として、当初から強くキーツにその存在を意識されていたのだ。ガイ医学校での治療体験と自らの抑鬱体験から、キーツは科学的医術の限界を痛感していたに相違ない。¹¹⁾ 彼が医学校で学んだ医術は患者の肉体の苦痛を効果的に軽減し得ないのみならず、その心の苦しみを完全に癒すこともできなかった。¹²⁾ しかし、キーツの実感としては、自然美や詩美との合一体験は — たとえ瞬時であれ — 確かな癒しの効果を発揮して見せてくれたのである。キーツが医師開業の資格を手にしたその時に医業を捨て、詩人として身を立てる決意を固めるに至った背景には、このような心身両面での詩人の実体験があったことを確認しておこう。

(二)

心身の病であるメランコリーの〈癒し手〉としてのアポロを当初からキーツが強く意識していたことは、彼の処女長編詩 *Endymion* (1817年作) の冒頭においてすでに明らかである。

A thing of beauty is a joy for ever:
Its loveliness increases; it will never
Pass into nothingness; but still will keep
A bower quiet for us, and a sleep
Full of sweet dreams, and health, and quiet breathing.
Therefore, on every morrow, are we wreathing
A flowery band to bind us to the earth,
Spite of despondence, of the inhuman dearth
Of noble natures, of the gloomy days,
Of all the unhealthy and o'er-darkened ways
Made for our searching: yes, in spite of all,

Some shape of beauty moves away the pall
From our dark spirits. Such *the sun*, the moon,
....
(*Endymion*, I, 1-13. 強調筆者)

「我々の暗い心」 (“our dark spirits”) がメランコリー患者の不健康な (“unhealthy”) 心的状態を指すことに疑問の余地はない。この憂鬱に閉ざされた心から死の覆い (“the pall”) を取り去り、「甘美な夢と健康と穏やかな呼吸に満たされた眠り」 (“a sleep / Full of sweet dreams, and health, and quiet breathing”) をもたらしてくれる「美しいもの」 (“A thing of beauty”, “Some shape of beauty”) の代表として、キーツは「太陽」(アポロ) と「月」(シンシア) とその他幾つかの美の形象を挙げる。この一節に病と癒しのイメージャリーが充溢している点に注目したい。「月」(シンシア) はこの詩の主人公の一人であり、彼女への言及は当然予想されるものである。しかし、いま重要なのは、キーツがこの「月」に先行する形で「太陽」(アポロ) を — 憂鬱を癒す美の力の源泉として — この詩に導入したことである。この事実は、*Endymion* という作品の中心テーマの性格を雄弁に物語っている。それは、一言で言えば、〈美体験による魂の救済〉という、〈癒し〉のテーマに他ならない。ちなみに、愛の体験も、キーツによればこの美体験の範疇に属するものである。¹³⁾

それでは、アポロがメランコリー (心身の病) を癒す現場を具体的な詩行に即して検証してみよう。次に掲げるのは、“Hymn to Pan”として有名な詩行の導入部である。

For 'twas the morn: Apollo's upward fire
Made every eastern cloud a silvery pyre
Of brightness so unsullied, that therein
A melancholy spirit well might win
Oblivion, and melt out his essence fine
Into the winds: rain-scented eglantine
Gave temperate sweets to that well-wooing sun;
The lark was lost in him; cold springs had run
To warm their chilliest bubbles in the grass;
Man's voice was on the mountains; and the mass
Of nature's lives and wonders puls'd tenfold,
To feel this sun-rise and its glories old.
(*Endymion*, I, 95-106)

アポロ (太陽) の登場によって地上 — それまで夜とメランコリーの闇に閉ざされていた地上 — から憂鬱の気が一掃され、自然界の万物がアポロの神力に依って生気を漲らせる様子が、ここには描かれている。“A melancholy spirit”

なる語句に注目しよう。これは「メランコリーの霊」とでも訳すべき語句であるが、その背景には、当時メランコリー症状が“blue devils”と呼び慣わされていた事実がある。¹⁴⁾ これはメランコリーが悪魔（‘blue devil’）によって引き起こされるという迷信に由来する。‘devil’は‘evil spirit’でもあるから、キーツの“A melancholy spirit”がこの‘blue devil’を指すことは間違いない。つまり、キーツの思考法では、アポロ（光／詩歌／医術の神）の神力の前では悪魔メランコリー（先の書簡中の“the greatest Enemy”）もすくすくと退散するしかないのである。これが、キーツが多分に楽観的に呼ぶ「天の清らかな宗教」（*Endymion*, I, 781: “The clear religion of heaven”）による救済の構図であった。

神秘的な美体験によって詩人が地上的存在の桎梏から解き放たれ、超現実的／超地上的境地を垣間見る瞬間を、キーツは次のように表現する。

O Poesy! for thee I grasp my pen
That am not yet a glorious denizen
Of thy wide heaven; yet, to my ardent prayer,
Yield from thy sanctuary some clear air,
Smoothed for intoxication by the breath
Of flowering bays, that I may die a death
Of luxury, and my young spirit follow
The morning sun-beams to the great Apollo
Like a fresh sacrifice; or, if I can bear
The o'erwhelming sweets, 'twill bring me to the fair
Visions of all places:...

(*Sleep and Poetry*, 53-63. 1816年冬作)

キーツは、詩歌の力と一体化することによって偉大な神アポロのもとへ昇ることを夢見ている。詩歌がもたらす美の息吹は「花開く月桂樹の呼気で、陶酔できるように和らげられた清らかな大気」（“some clear air, / Smoothed for intoxication by the breath / Of flowering bays”）と表現されるが、この「清らかな大気」はその年の7月までキーツが身を置いていたガイ医学校の病棟の淀んだ空気と対比されているに違いない。キーツが夢見る死は、医学生として彼が病棟で目撃した醜悪な現実の死ではなく、詩美の世界に遊ぶ魂の恍惚状態の比喩としての「贅美な死」（“a death / Of luxury”）である。その類の死（肉体の恍惚たる休眠状態）はむしろ魂を活性化し、詩人の靈魂をアポロのもとへと運び上げるのである。¹⁵⁾ この一節のアポロが詩歌と光の神として描かれているのは一目瞭然である。だが、たとえ間接的にせよ、ここには〈癒しの神〉としてのアポロも厳然として存在している。

光／詩歌／医術の神アポロによる癒しは — 初期の作品群に見る限り — ともしれば〈感覚的次元の癒し〉に留まる傾向が見られる。この種の癒しは、キーツにいったいどの程度有効な治癒効果をもたらしたのであろうか。どうやらこの感覚的癒しの有効性を検証する必要がありそうである。そこで、次の詩句に注目したい。

Oh, how I love, on a fair summer's eve,
When streams of light pour down the golden west,
And on the balmy zephyrs tranquil rest
The silver clouds, far — far away to leave
All meaner thoughts, and take a sweet reprieve
From little cares: — to find, with easy quest,
A fragrant wild, with Nature's beauty drest,
And there into delight my soul *deceive*.

(*Oh, how I love, on a fair summer's eve*, 1-8.
1816年夏作. 強調筆者)

すでにお馴染みの自然美体験による心身の癒しの構図がここには見られる。この〈癒し〉には予想通りアポロの力（“streams of light”）も与っている。キーツにとってこれは理想的な美体験の瞬間を歌った詩句と見えるのであるが、いささか気になる表現が目につく。それは“there into delight my soul *deceive*”という字句である。「私の魂を欺いて喜びを感じさせる」という言い回し、特に“deceive”という単語の語感には、美体験がもたらす恍惚状態に必ずしも安心立命できずにいる詩人の姿が透けて見える。この事実、最も初期の段階からキーツが感覚美の次元に留まる美体験の危うさ（欺瞞性）を自覚していたことを物語ってはいないだろうか。キーツは、詩そのものに潜在する危険性をたしかに忘れてはいない。

I am sometimes so very sceptical [*sic*] as to think
Poetry itself a mere Jack a lantern to amuse
whoever may chance to be struck with its brilliance
— ¹⁶⁾

“Jack a lantern”（*ignis fatuus*）とは、迷信によれば、道に迷った旅人などを沼地に誘い込み、破滅させる悪魔の鬼火である。詩が伏在させる迷妄性を一方においてこの様に認識し得る詩人である以上、キーツが感覚美レベルでのアポロによる癒し／救済に満足できるはずはない。案の定、キーツのアポロは他方で人道主義者の相貌をも呈することになる。

And can I ever bid these joys farewell?

Yes, I must pass them for a nobler life,
 Where I may find the agonies, the strife
 Of human hearts: for lo! I see afar,
 O'er sailing the blue cragginess, a car
 And steeds with streamy manes — the charioteer
 Looks out upon the winds with glorious fear:
 And now the numerous trappings quiver lightly
 Along a huge cloud's ridge; and now with sprightly
 Wheel downward come they into fresher skies,
 Tipt round with silver from the sun's bright eyes.
 Still downward with capacious whirl they glide;...

(*Sleep and Poetry*, 122-33. 1816年冬作)

ここにはキーツが自己完成の目標とする詩人の理想像が描かれている。真の詩人は、アポロ(“the charioteer”)同様に感覚の喜び(“these joys”)を超克し、「人類の心の痛苦や煩悶」を直視してその苦しみを軽減し、彼らの魂を癒し救済することのできる人でなければならない。*The Fall of Hyperion*におけるほどあからさまではないにせよ、初期の作品*Sleep and Poetry*において、早くもキーツは「詩人は賢者、人道主義者、そして万人の医師」に近い思いを吐露していたのである。もし詩人が本当にそのような存在であるのなら、詩人となるためには医術を捨てることも許されよう、というのがキーツの偽らざる思いであったはずだ。そのことを裏付けるかのように、キーツの書簡には〈詩人としてこの世に善をなさねばならぬ〉という、ほとんど強迫観念に近い思いが散見される。一例を挙げれば――

I find that I can have no enjoyment in the World but continual drinking of Knowledge — I find there is no worthy pursuit but the idea of doing some good for the world...I have been hovering for some time between an exquisite sense of the luxurious and a love for Philosophy — were I calculated for the former I should be glad — but as I am not I shall turn all my soul to the latter.¹⁷⁾

詩による明白な形で人類への貢献を自らに義務づけるキーツは、詩の感覚的喜び(“an exquisite sense of the luxurious”)に安住すること——そこにこそ詩人キーツの出発点があったはずだが——を禁忌とする心性(“a love for Philosophy”)を作り出してしまう。「詩の偉大な目的は、人類の苦悩を和らげ、人類の思想を高める友となること」(*Sleep and Poetry*, 245-47: “...the great end / Of Poesy, that it should be a friend / To soothe the cares and lift the thoughts of man.”)とキーツは揚言する。しかし、

実際には、これは若き詩人が実行するにはあまりに困難な目標であった。

ここに、26歳を待たずに——人間としての成熟期を迎える前に——この世を去らねばならなかったキーツの不幸がある。やがて明らかになる通り、キーツの悲劇は〈存在〉(“an exquisite sense of the luxurious”)が〈当為〉(“a love for Philosophy”)を裏切り続けるという悲劇でもあったのだ。

(三)

現実が詩人の理想を裏切り続けるという悲劇は、キーツの処女長編詩*Endymion*の中心テーマでもある。

キーツは*Endymion*で主人公に自己を託して、必死でエンディミオンの憂鬱症を癒そうと試みる。エンディミオンの抑鬱症の原因は、月姫シンシアとの愛の交歓(神秘的快美体験)が束の間のヴィジョン体験に留まり、その快美体験が惹起する喜びを現実のものとして保持し得ないところにある。エンディミオンの次の嘆きは、キーツ自身が日常体験していたはずの「失望・落胆・抑鬱」の性質を示唆している。

I started up, when lo! refreshfully,
 There came upon my face, in plenteous showers,
 Dew-drops, and dewy buds, and leaves, and flowers,
 Wrapping all objects from my smothered sight,
 Bathing my spirit in a new delight.
 Aye, such a breathless honey-feel of bliss
 Alone preserved me from the drear abyss
 Of death, for the fair form had gone again.
 Pleasure is oft a visitant; but pain
 Clings cruelly to us, like the gnawing sloth
 On the deer's tender haunches: late, and loth,
 'Tis scar'd away by slow returning pleasure.
 How sickening, how dark the dreadful leisure
 Of weary days, made deeper exquisite,
 By a fore-knowledge of unslumbrous night!

(*Endymion*, I, 898-912)

アポロ同様に詩美のシンボルと目されるアポロの妹シンシア(“the fair form”)は、エンディミオン=キーツにとって所詮捕捉し難い存在であった。ここに窺える通り、詩美／理想美との束の間の合一体験は、その超地上性／超現実性ゆえに結局詩人を以前にもまさるメランコリー(“the drear abyss / Of death”)へと突き落とす。*Endymion*全編は、メランコリーとその癒しを巡るこの悪循環を執拗に

描き出すことになる。そして、*Endymion* という物語の枠内でキーツが最終的に呈示する〈癒し〉の手段が、「天の清らかな宗教」(“The clear religion of heaven”)に代わる「ほの暗き宗教」(*Endymion*, IV, 954: “This dusk religion”)である。「ほの暗き宗教」とは、メランコリーを忌避するのではなく、むしろ積極的にメランコリーの闇(*Endymion*, IV, 548: “this Cave of Quietude”)に沈潜することによって癒しを得る救済法の謂である。¹⁸⁾ だが、この「ほの暗き宗教」も — ある意味で理想美との合一体験に似て — やはり日常性を超越した神秘的経験であることに変わりはない。

...the man is yet to come
 Who hath not journeyed in this native hell.
 But few have ever felt how calm and well
 Sleep may be had in that deep den of all.
 There anguish does not sting; nor pleasure pall:
 Woe-hurricanes beat ever at the gate,
 Yet all is still within and desolate.
 Beset with painful gusts, within ye hear
 No sound so loud as when on curtain'd bier
 The death-watch tick is stifled. Enter none
 Who strive therefore: on the sudden it is won.
 Just when the sufferer begins to burn,
 Then it is free to him; and from an urn,
 Still fed by melting ice, he takes a draught —
 Young Semele such richness never quaft
 In her maternal longing. Happy gloom!
 Dark Paradise!...

(*Endymion*, IV, 522-38)

悲哀と憂鬱の窮みに身を置く者が絶望の「地獄」の果てに見いだす「天国」(“Dark Paradise”)がある、とキーツは主張する。その「幸福な闇／憂鬱」(“Happy gloom”)は人が努力して得られるものではなく、さながら天からの恩寵のごとく「突然与えられる」(“on the sudden it is won”)ものなのだ。主人公エンディミオンは、度重なる絶望体験(メランコリー体験)の末にこの「暗い天国」に到達し、心を癒され — その後さらに多少の曲折を経て後 — 「思いもかけぬ変化によって」(*Endymion*, IV, 992: “by some unlook'd for change”)「霊化され」(*Endymion*, IV, 993: “Be spiritualiz'd”), 神格化されて恋人シンシアと結ばれるに至る。かくして物語の上では、主人公エンディミオン＝キーツは、メランコリーという神秘的情動に固有の治癒能力によって回復のみちを辿り、やがて天上の至福を得るのであるが、この種の大団円は果たして読者を — また作

者自身をも — 十分に納得させ得るものであろうか。*Endymion* の序文に明らかな通り、「ほの暗き宗教」によるいささか性急な主人公の救済に対して誰よりも強い不満を漏らすのが、実は作者キーツなのである。キーツの自己批判の筆法は鋭い —

The two first books, and indeed the two last, I feel sensible are not of such completion as to warrant their passing the press; nor should they if I thought a year's castigation would do them any good; — it will not: the foundations are too sandy. It is just that this youngster [i. e., *Endymion*] should die away: a sad thought for me, if I had not some hope that while it is dwindling I may be plotting, and fitting myself for verses fit to live.¹⁹⁾

これを見れば、キーツが作品 *Endymion* に全く満足していなかったことが分かる。*Endymion* の中心的主題が、理想美との合一による(前半部)、そしてメランコリーへの沈潜による(後半部)、主人公の心身の癒しであったことを想起しよう。*Endymion* の主題がそのようなものであったとすれば、「基盤が脆すぎる」(“the foundations are too sandy”)というキーツ自身の評言は、彼の処女長編詩が説く類の〈癒し〉が — 強度はともかくとして、その持続性において — はなはだ有効性に欠けるものであったことを示唆しているように思われる。上の序文中でキーツが言及する「後世に残るに相応しい詩」(“verses fit to live”)が、恒常的な効果を有する〈癒し〉を可能とする作品であったことは間違いない。*Hyperion* や *The Fall of Hyperion* という作品は、当然 *Endymion* への反省に立って、恒常的〈救済〉への方途を模索する詩人の試みとなる運命にあったのだ。

Hyperion へ移る前に、「思考の生活よりは感覚の生活が送りたい」(“O for a Life of Sensations rather than of Thoughts!”)²⁰⁾と公言して憚らぬキーツの作品の、その感覚中心主義ゆえの脆さ(限界)にいますこし触れておきたい。アポロに言及する次の詩は、キーツにとって自然美体験や読詩／作詩体験がいかに強度の感覚的興奮をもたらすものであったかを物語っている。

Hence burgundy, claret, and port,
 Away with old hock and madeira!
 Too earthly ye are for my sport;
 There's a beverage brighter and clearer!
 Instead of a pitiful rummer,
 My wine overbrims a whole summer;

My bowl is the sky,
 And I drink at my eye,
 Till I feel in the brain
 A Delphian pain —
 Then follow, my Caius, then follow!
 On the green of the hill,
 We will drink our fill
 Of golden sunshine,
 Till our brains intertwine
 With the glory and grace of Apollo!
 (Hence burgundy, claret, and port, 1-16)

ここでは、アポロは直接的には太陽／光および詩歌の神としてイメージされているが、詩人の心身をリフレッシュしてくれるという意味では、彼は癒しの神でもある。詩人は告白する、「戸外の自然に触れ、蒼穹の下で太陽の光を浴びていると、酒に酔った時以上に強烈な詩想が脳裏に沸き上がってくる」と。さらに興味深いのは、この詩の続編と目される次の詩である。²¹⁾

God of the meridian!
 And of the east and west!
 To thee my soul is flown,
 And my body is earthward press'd:
 It is an awful mission,
 A terrible division,
 And leaves a gulf austere
 To be fill'd with worldly fear.
 Aye, when the soul is fled
 Too high above our head,
 Affrighted do we gaze
 After its airy maze —
 As doth a mother wild
 When her young infant child
 Is in an eagle's claws,
 And is not this the cause
 Of madness? — God of Song,
 Thou bearest me along
 Through sights I scarce can bear;
 O let me, let me share
 With hot lyre and thee
 The staid philosophy.
 Temper my lonely hours
 And let me see thy bowers
 More unalarmed! * * *

(God of the meridian!, 1-25)

強烈な詩想に心を奪われている瞬間には、さながら魂と肉体が二つに分離したかのような心地 (“A terrible division”) を味わう、とキーツは言う。一種の詩的狂気 (“madness”) を描くこの詩句におそらく誇張はあるまい。キーツの数々の作品に見られる〈ヴィジョン体験〉の原型を、我々はいま上の詩句に確認しているのである。少なくともこの時期 (1818年1月) のキーツ — *Endymion* を書き上げたばかりのキーツ — にとって、アポロは目眩く感覚美の源泉 (“hot lyre”) としての詩神なのである。その様な神アポロによる〈救済〉の限界 — 超地的〈癒し〉であるがゆえの危険性 — を自覚するキーツが求めるのは、「落ち着いた哲学」 (“staid philosophy”) である。ほんの二箇月前に「思考の生活よりは感覚の生活が送りたい」と告白した同じ詩人が、「もっと心静かにアポロの木陰を見ることができるよう、(落ち着いた哲学で) 私の孤独を和らげてください」とアポロに祈願するのである。先にも触れたが、〈存在〉 (“an exquisite sense of the luxurious”) と〈当為〉 (“a love for Philosophy”) の間を果てしなく揺動するのがキーツの特徴である。若きキーツのこの心の揺れが *Endymion* 以降のアポロの性格と言動に強く反映されることになる。そしてそこには、アポロ(詩歌)による〈癒し〉を巡るキーツの不安と懐疑と反省が顔を覗かせるのである。

(四)

Endymion の序文の掉尾でキーツは読者にこう約束する —

I hope I have not in too late a day touched the beautiful mythology of Greece, and dulled its brightness: for I wish to try once more, before I bid it farewell [sic].²²⁾

この約束を果たすべく執筆されるのが、*Hyperion* である。*Endymion* の主題がこれまで見てきた通りのものであるとすれば、*Hyperion* の — そしてその続編としての *The Fall of Hyperion* の — 中心テーマも〈癒し〉であることを免れない。そこで癒され、救済されねばならないのは、オリュンポス神族に敗れた Saturn を初めとするタイタン族の神々である。タイタン神族が身を沈める谷間の「憂鬱と悲哀」(*Hyperion*, I, 91: “all the gloom and sorrow of the place”) を和らげ、癒すべく、キーツは海神 Oceanus にタイタン神族救済の哲理を開陳させる。

Now comes the pain of truth, to whom 'tis pain;
 O folly! for to bear all naked truths,
 And to envisage circumstance, all calm,

That is the top of sovereignty. Mark well!
 As Heaven and Earth are fairer, fairer far
 Than Chaos and blank Darkness, though once chiefs;
 And as we show beyond that Heaven and Earth
 In form and shape compact and beautiful,
 In will, in action free, companionship,
 And thousand other signs of purer life;
 So on our heels a fresh perfection treads,
 A power more strong in beauty, born of us
 And fated to excel us, as we pass
 In glory that old Darkness: nor are we
 Thereby more conquer'd, than by us the rule
 Of shapeless Chaos....

... for 'tis the eternal law

That first in beauty should be first in might:
 Yea, by that law, another race may drive
 Our conquerors to mourn as we do now.

(*Hyperion*, II, 202-17, 228-31)

この哲理を要約すれば、タイタン神族は〈美の進化論〉の原則(“first in beauty should be first in might”)ゆえにオリュンポス神族の前に滅びていく、と言うのだ。そしてキーツは、新しい神族が体現する美の化身として「若きアポロ」(*Hyperion*, II, 293-94: “young Apollo”)を物語に登場させる。ところが、実際に作品中に現れるアポロは — 少なくとも最初の登場の時点では — あの *Endymion* の主人公に似て、典型的なメランコリー患者の症候を示すのである。

...For me, dark, dark,

And painful vile oblivion seals my eyes:
 I strive to search wherefore I am so sad,
 Until a melancholy numbs my limbs;
 And then upon the grass I sit, and moan,
 Like one who once had wings. — O why should I
 Feel curs'd and thwarted, when the liegeless air
 Yields to my step aspirant? why should I
 Spurn the green turf as hateful to my feet?

(*Hyperion*, III, 86-94)

ここには容易に作者キーツの自画像を認めることができる。それは地上の桎梏に縛られ、天空への飛翔を妨げられている詩人の姿に他ならない。このアポロ=キーツは、未だ〈癒し手〉たり得ず、むしろ〈癒し〉を希求する弱年の若者に過ぎない。*Hyperion* の作者の使命は、このアポロを〈癒しの神〉へと変貌・成長させ、そのことによってタ

イタン神族 (*Hyperion* はその頭領)のみならず、自己の救済をも同時に図ることであったはずだ。とすれば、作品 *Hyperion* の成否はひとえにアポロの神格化にかかっていることになる。当然、読者はこの点を軸にして劇が展開することを予想し、期待もするのであるが、実際のアポロの神格化の場面はあっけない程に瞬時に達成され、それと共に物語は中断されてしまう。

Soon wild commotions shook him, and made flush
 All the immortal fairness of his limbs;
 Most like the struggle at the gate of death;
 Or liker still to one who should take leave
 Of pale immortal death, and with a pang
 As hot as death's is chill, with fierce convulse
 Die into life: so young Apollo anguish'd:
 His very hair, his golden tresses famed,
 Kept undulation round his eager neck.
 During the pain Mnemosyne upheld
 Her arms as one who prophesied. — At length
 Apollo shriek'd; — and lo! from all his limbs
 Celestial * * * * *

(*Hyperion*, III, 124-36)

アポロは記憶の女神 Mnemosyne の助けによって突如として神となるのであるが、その神化のプロセスは — 劇としての具体的な説明に欠ける以上 — エンディミオンの神格化に劣らず唐突で神秘的なものである。恐らく、*Hyperion* の作者は *Endymion* の作者と大きく変わってはいないのであろう。つまり、*Hyperion* においてもキーツは、自己救済(癒し)の確かな手立てと成り得る「哲学」を未だ確立するには至っていないのだ。アポロの神格化と同時に作品が中断されねばならなかった原因が、そこにある。

Hyperion の中断から数箇月を経て開始された *The Fall of Hyperion* の真の主人公は、タイタン神族でもアポロでもなく、作者キーツその人である。したがってそこでは、前作とは異なり、キーツの生の声が至る所に聞かれる。その声とは(詩人は真の医者/慰者たり得るのか)を自問する叫びである。下に掲げるのは Moneta (Mnemosyne と同一神) と詩人=キーツとの、詩ならびに詩人の本性を巡る対話である。

“None can usurp this height,” return'd that shade,
 “But those to whom the miseries of the world
 Are misery, and will not let them rest.
 All else who find a haven in the world,
 Where they may thoughtless sleep away their days,

If by a chance into this fane they come,
Rot on the pavement where thou rotted'st
half." —

"Are there not thousands in the world," said I,
Encourag'd by the sooth voice of the shade,
"Who love their fellows even to the death;
Who feel the giant agony of the world;
And more, like slaves to poor humanity,
Labour for mortal good? I sure should see
Other men here: but I am here alone."
"They whom thou spak'st of are no vision'ries,"
Rejoin'd that voice — "They are no dreamers weak,
They seek no wonder but the human face;
No music but a happy-noted voice —
They come not here, they have no thought to
come —
And thou art here, for thou art less than they.
What benefit canst thou do, or all thy tribe,
To the great world? Thou art a dreaming thing;
A fever of thyself — think of the earth;
What bliss even in hope is there for thee?
What haven?..."

(*The Fall of Hyperion*, I, 147-71)

ここには明らかに〈詩人〉対〈医者／慰者〉の対比が見られる。キーツは、似非詩人を「脆弱な夢想家」("vision'ries", "dreamers weak) と断定し、人類の痛苦の眞の癒し手としての医者との種の詩人とを峻別する。「死ぬまで同胞を愛し、世の人々の大きな苦痛を感じ取り、しかも、可哀想な人類の奴婢さながら、人のために働く幾千の方々」("thousands in the world/...Who love their fellows even to the death;/Who feel the giant agony of the world;/And more, like slaves to poor humanity,/Labour for mortal good") が、キーツもかつてその仲間たることを目指した医者集団であることに疑問の余地は無い。Moneta (キーツの理性の声) は、これらの医師に比べれば「キーツという詩人ははるかに劣る」("thou art less than they"), と断言する。Moneta のこの断罪に抗議する形でなされるのが、「詩人は賢者、人道主義者、そして万人の医師」("...sure a poet is a sage;/A humanist, physician to all men.") という先のキーツの発言であった。しかし、Moneta のキーツ批判には止むところがない。

"...Art thou not of the dreamer tribe?

The poet and the dreamer are distinct,
Diverse, sheer opposite, antipodes.

The one pours out a balm upon the world,
The other vexes it..."

(*The Fall of Hyperion*, I, 198-202)

要するに Moneta は、キーツという詩人はアポロ (詩人／医者／慰者) にほど遠い似非詩人 ("dreamer") である、と言いたいのだ。Hyperion の主人公＝キーツが突如アポロへの祈願を口にするのはこの Moneta の発言の直後である。

...Then shouted I
Spite of myself, and with a Pythia's spleen,
"Apollo! faded, far flown Apollo!
Where is thy misty pestilence to creep
Into the dwellings, through the door crannies,
Of all mock lyrists, large self worshipers,
And careless hectorers in proud bad verse.
Though I breathe death with them it will be life
To see them sprawl before me into graves...."

(*The Fall of Hyperion*, I, 202-10)

Hyperion では"young Apollo"と一体化する節も見えたキーツではあるが、今やアポロ ("Apollo! faded, far flown Apollo") は彼のもとから遙かに遠ざかってしまう。アポロ (理想の詩人) との合一のみちを閉ざされたキーツは、己もろとも似非詩人の群を滅ぼすことをアポロに祈願する。そのアポロは、これまでその姿を見せることのなかった〈疫病をもたらす神〉としてのアポロである。²³⁾ キーツにとってのこのアポロの相貌の変化 — 守護する神から処罰する神への変化 — は、理想の詩人アポロに近づけない詩人の絶望の深さを示唆している。眞の〈慰者〉たり得ない己の詩人としての非力を痛感するにつれ、キーツとアポロとの心理的距離はますます隔たっていったのである。

The Fall of Hyperion の中断の後間もなくしてキーツはこの世を去る。その短い人生の最後まで、キーツの胸中には医師となって人類のために奉仕するという夢 — 詩人を諦めることの代償としての苦い夢 — が燻っていたことを忘れてはならない。

My book is coming out with very low hopes, though
not spirits on my part. This shall be my last trial; not
succeeding, I shall try what I can do in the
Apothecary line.²⁴⁾

キーツにとって、詩人として人類に奉仕するみちが閉ざさ

れたかに思えた時、生涯の到達目標としてのアポロ（詩人／医者／慰者）へ近づきたく残されたみちは、医業を選ぶことしか無かった。「（この詩集が）成功しなかったら、薬剤医師のみちで力をためてみることになるだろう」という、死を間近に控えてなされたキーツの発言には、アポロを巡るこの様に壮絶な詩人の闘いが潜んでいたのである。

注

- 1) 本論は文部省の平成12年度科学研究費補助金による研究成果（課題番号：11610498）の一部である。
- 2) Keatsの詩の引用は、Jack Stillinger, ed., *The Poems of John Keats* (Cambridge, Mass.: Harvard U. P., 1978) に拠る。以下、*Poems* と略記する。
- 3) ‘healer’としての詩人という観点からキーツを論じた研究としては、以下のものが有益である。Cf. Donald C. Goellnicht, *The Poet-Physician: Keats and Medical Science* (Pittsburgh: Univ. of Pittsburgh Pr., 1984), pp. 164ff; Hermione de Almeida, *Romantic Medicine and John Keats* (Oxford: Oxford U. P., 1991), pp. 17ff.
- 4) キーツの愛読書、ランプリエールの『古典辞典』に拠れば、アポロにはこの他に〈予言の神〉や〈疫病の神〉という性格もある。特に後者は本論において重要な意味を持つことになる。Cf. John Lempriere, *A Classical Dictionary*, 3rd ed. (London: Routledge & Kegan Paul, 1984), pp. 61-62.
- 5) See H. E. Rollins, ed., *The Letters of John Keats: 1814-1821*, 2 vols. (Cambridge, Mass.: Harvard U. P., 1958), I, 279. Keatsの書簡の引用はこれに拠り、以下 *Letters* と略記する。
- 6) Ian Jack, *Keats and the Mirror of Art* (Oxford: Oxford U. P., 1967), p. 189. 最近我が国で出版された松家理恵著『キーツとアポローン — ジョン・キーツの詩とギリシア・ローマ神話』(東京: 英宝社, 2000年)も、基本的には Ian Jack の視点に立って論じられている(同書, 11-61, 309-35頁参照)。本論において、筆者はこの様な見方への修正と補足を試みたつもりである。
- 7) See H. E. Rollins, ed., *The Keats Circle*, 2 vols. (Cambridge, Mass.: Harvard U. P., 1948), II, 186.
- 8) *Letters*, I, 142.
- 9) この点については、キーツの弟 George の次の証言が参考になる。See *The Keats Circle*, I, 284-85: “...I in a great measure relieved [*sic*] him by continual sympathy, explanation, and inexhaustible spirits, and good humour, from many a bitter fit of hypochondriasm, he avoided teasing any one with his miseries but Tom and myself and often asked our forgiveness....no one in England understood his character perfectly but poor Tom and he had not the power to divert his frequent melancholy, and eventually encreased his disease [*sic*] most fearfully by the horrors of his own lingering death.”
- 10) Cf. *Endymion*, I, 777-97.
- 11) キーツの友人 Brown は、キーツが薬剤医師という職業に就くことをためらったこと背景を次のように説明している。See *The Keats Circle*, II, 56: “He has assured me that muse had no influence over him in his determination, he being compelled, by conscientious motives alone, to quit the profession, upon discovering that he was unfit to perform a surgical operation. He ascribed his inability to an overwrought apprehension of every possible chance of doing evil in the wrong direction of the instrument. ‘My last operation,’ he told me, ‘was the opening of a man’s temporal artery. I did it with the utmost nicety; but, reflecting on what passed through my mind at the time, my dexterity seemed a miracle, and I never took up the lancet again.’”
- 12) 治療技術という点での当時の医学の不完全さについては、次の研究書を参照。Cf. Goellnicht, *op. cit.*, pp. 20, 29, 39.
- 13) Cf. *Endymion*, I, 797-842.
- 14) *OED* [2, a] に拠れば, “blue devils”は“Despondency, depression of spirits, hypochondriac melancholy”を意味する。なお, “blue devils”なる語句はキーツの書簡中にも2度顔を見せている。See *Letters*, II, 168, 210.
- 15) このようなキーツの発想にはワーズワスの影響が窺えるように思われる。See *Lines written a few miles above Tintern Abbey*, 44-50: “Until, the breath of this corporeal frame, /And even the motion of our human blood/Almost suspended, we are laid asleep/In body, and become a living soul: /While with an eye made quiet by the power/Of harmony, and the deep power of joy, /We see into the life of things.” ワーズワスの詩の引用は Stephen Gill, ed., *William Wordsworth* (Oxford: Oxford U. P., The Oxford Authors, 1984) に拠る。
- 16) Keats’s letter to Benjamin Bailey, 13 March 1818. See *Letters*, I, 242.
- 17) Keats’s letter to John Taylor, 24 April 1818. See *Letters*, I, 271. Cf. *Letters*, I, 267, 293, 387.
- 18) この辺りの経緯については、拙論『キーツと「愛の宗教」』(九州大学英語英文学研究会『英語英文学論叢』, 第41集, 1991年) 13-44頁を参照されたい。
- 19) *Poems*, p. 102.
- 20) Keats’s letter to Benjamin Bailey, 22 November 1817. See *Letters*, I, 185.
- 21) ちなみに、Miriam Allott はこれら二つの詩を同一の作品と見なし、自らが編集したキーツ詩集に単一の作品として掲載している。See Miriam Allott, *The Poems of John Keats* (London: Longman, 1970), pp. 299-301.
- 22) *Poems*, p. 103.
- 23) 注4)を参照。
- 24) Keats’s letter to Charles Brown, about 21 June 1820. See *Letters*, II, 298. Cf. *Letters*, II, 70, 112-13, 114.